

様々なパターンが存在する。具体的には、「教会が提供する物質的サービスを道具的に利用し、信仰を内面化しない非信者」、「信仰をある程度内面化するが、教会へのコミットメントを避ける周辺の信者」、「信仰を内面化し、教会にコミットメントをもつ信者」に類別することができる。教会への関わりに差異が生じるのはなぜか。本発表では五年以上にわたる西成小隊の参与観察記録とボランティア・スタッフとして関与している(元)野宿者への聞き取りを通じて、上記の問いを明らかにする。

多くの野宿者が継続的に礼拝に参加するなかで、入信の有無が分かれる主要因は「下降移動の程度」である。長期間、日雇労働に従事してきた「典型的な野宿者」は、野宿生活を近い将来起こりうるものとして想定していたり、過去に経験していたりすることが少なくない。彼らは下降移動の程度が比較的緩やかであることから、野宿化するなかで生じる葛藤状況がさほど深刻ではなく、救済期待が顕在化しにくい。したがって、彼らは「生きぬき戦略」として教会が差し出すサービスを単に道具的に利用するにとどまり、入信には至ることは少ない。一方、激しい下降移動を経験した「非典型的な野宿者」も「典型的な野宿者」と同様、当初においては「生きぬき戦略」として教会のサービスを道具的に利用する。しかし、現状に対する不満を強くもつ者もあり、葛藤状況を逡巡するべく、新たな意味体系を受容し、入信することがしばしばある。西成小隊ではホームレス伝道を開始した一九九九年から二〇〇九年までの十一年間に一〇〇人以上の野宿者が入信している。そのなかで継続的に教会に所属したケースは四〇人ほどで、今日、積極的に教会活

動に参加しているボランティア・スタッフは一〇人ほどにとどまる。

このように入信をしても教会への所属が持続する者は多くない。所属の有無が分かれる主要因は「親密圏の要否」である。教会は個々人の内面に積極的に介入する「関与規範」をもっている。それは、釜ヶ崎で広くみられる関係規範とは大きく異なる。社会学者の青木秀男や西澤晃彦が指摘している通り、流動的な匿名社会である寄せ場では、互いの出自や経歴を問わず、自らの過去を隠匿する傾向がある。日雇労働の経験が長い「典型的な野宿者」の多くは、このような「不関与規範」を内面化していることから、仮に教会にシンパシーをもって入信したとしても、「関与規範」が強くはたらく教会に所属することには抵抗感を示す。一方、過去に比較的安定した社会関係を有していた野宿者は教会の「関与規範」を好意的に受け止め、教会に帰属する傾向がある。

「民衆」概念による

近世フランス神秘主義へのアプローチ

渡辺 優

近世西欧キリスト教世界において、神秘主義は、そもその起源から異質な宗教的学知とのあいだの緊張関係に置かれていた。神秘家たちは、自己の体験の特異性を強調し、神秘主義に

第4部会

関わる文献群を生み出していく中で、合理性の要請に適應しようとするスコラ神学との対立を深めていった。そうした近世の神秘主義をめぐる緊張関係は純粋な知の領域にとどまらず、同時代の政治的社会的變動とも地平を同じくしている。つまるところ、近世神秘主義は近代社会を準備したさまざまな歴史的断層がその内部で交錯する宗教史的争点なのだ。このような視座から近世神秘家たちの霊的体験のダイナミズムを理解しようとするとき、「民衆」という概念が深みのある問題提起として現われてくる。これを明らかにすることが本発表の主眼である。

フランスでは、十七世紀初め頃からイタリアやスペインの神秘主義が移入され、世紀半ばに神秘主義的思潮の全盛期を迎える。他方、十七世紀フランスには、コスモロジーから心性の次元まで、西欧社会が中世から近代への転換を遂げていったことを示す重大な指標がいくつも認められる。実に、フランス神秘主義はすでにその誕生の時から嫌疑と非難にさらされていた。ソフィ・ウダールが「反神秘主義」の圧力下で葛藤する神秘家のエクリチュールを取り出して見せたように、本研究もまた、十七世紀神秘主義の諸潮流がさまざまな対立と緊張を刻印された固有の歴史性を帯びているという前提から出発し、神秘家のテクストに走る「断層線」に注目することになる。

ピエール・ド・ベリユルからギュイヨン夫人まで、十七世紀フランスの神秘家たちはしばしば「諸聖人〔神秘家〕」の学知 (la science des saints) について語っている。この「学知」は、多くの場合、高度な学識を備えた専門家たちの抽象的で思弁的なスコラ的学知に対立させながら語られた。そして、この

学知の担い手である「諸聖人」は、「しがない者たち」、女性や子供、学のない「素朴な人々」、さらには「狂人」や「野蛮人」として現われてくる。「諸聖人の学知」を語る神秘家たちの口調には、おそらく彼らが実際に出会った「しがない人々」とのさまざまな出会い、やり取りが反響している。

ミシェル・ド・セルトーは、民衆文化が近世神秘主義研究のクリティカルなテーマであることを示唆した。歴史人類学や社会史の成果によって近世フランスにおける「民衆文化」の歴史的問題性を明確化しようとする、十七世紀の民衆宣教が問題として前景化してくる。しかし、従来の研究では、民衆文化の側が宣教師にもたらしたもののや、二つの文化の境界上での緊張感ある交流は見落とされてきた。「民衆宣教において体験される他者との交流と、宣教師である宗教的主体とのあいだに、いかなる動態的關係が認められるか」という問いを十七世紀フランス神秘主義研究において提起することには実り豊かな可能性がある。実際、それぞれに神秘家として名高い、フランス靈性を代表する靈性家たち (ヴァンサン・ド・ポール、ジャン・ウド、ジャン・ジャック・オリエなど) は、民衆宣教の推進者でもあった。

とくに、イエズス会士スランの書簡集は、こうした視座から掘り起こされるべき豊かな脈を形成している。彼にとつて、田園地帯や農村部での民衆宣教は、歓びと自由の感覚にあふれた体験だったようである。それは、彼の神秘主義「思想」の豊饒化にも何らかの形で寄与していると考えられる。田舎で出会った数多くの「しがない人々」との交流や、そこでの「あ

りふれた信仰生活」の体験は、彼の言葉に開放性とダイナミズムをもたらしている。彼において宣教と思索は一体のものであった。今後は、書簡集によって宣教活動を追いながら、並行してそれ以外の諸論考を考察していく必要がある。

ヴィジョンとイメージ

細田 あや子

宗教と美術との関係をどのように方法論的に理論づけるかという課題に対し、中世ヨーロッパの幻視家（なかでもヒルデガルト・フォン・ビンゲン）が見たヴィジョンの視覚イメージを手がかりに考察する。宗教において美術がどのような位置を占め、どのような役割を果たしたのかという問題、つまり美術作品を通して、宗教における人びとの認識、イメージに対する宗教的態度といったものを考察するための端緒として、まずは「幻視の図像学」という観点を明らかにする。それに基づいて、メタ絵画あるいはメタ宗教絵画といえるような作例を取り上げ、美術作品が宗教生活にどのように用いられていたかを検討する。

幻視は宗教的な告知、知らせの媒体である。これらを通して神・超越者がメッセージを伝える。その神や超越者の顕現は現実世界への異界の現出となるが、その異なる次元を視覚的に表現するためにさまざまな工夫が施される。幻視の絵画表現をみるにあたっては、幻視者のみが描出されているもの、幻視者と

幻視の内容があわせて描出されているもの、幻視のみが描出されているもの、と大きく三通りのタイプに分類することができ。幻視の内容だけか、幻視者もあわせて描出されているのか否かといった違いが、その画像内容の理解を左右することがある。さらに人間（幻視を受け取る側）と超越者との関係もきわめて巧妙にかつ多様に描出されうる。天使が幻視者と幻視内容とを結合する場合があるように、幻視や夢では、異次元なるもの、この世ならざるものとのコミュニケーションが決定的な意味を持つ。天使のほかさらに、雲や光線による場の仕切り、太陽や星など天体の（異常な）描写による超自然現象の表現、神の手を通して神の存在そのものを示す手法などにより、異次元世界が表現される。

また幻視を見る者は受動的というよりは、彼／彼女らに対しては積極的な振る舞いが前提とされていると考えられる。幻視のなかで幻視者たちは神に問いかけをし、応答を受け取るという双方による対話がなされるのである。幻視者が自らの幻視内容を見上げている画像などでは、観想の状態にあったり、自ら幻視の意味（超越者からのメッセージなど）を把握する幻視者、さらには預言者、予見者という側面が強調される。

ところで、中世からルネサンスに至るまで宗教美術の機能のひとつとして、信仰心をかきたてるため、心を動かさせるために画像は用いられるという絵画論があげられる。そのような画像として、Andachtsbild（観想のための像、祈念像、祈禱像）というものがある。祈念像のような視覚イメージを目の前にしてヴィジョンを体験し、祈りや神との対話がなされる場合も少